

温故知新

日野歴史探訪

私たちの住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化で彩られています。温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

大字奥師

大字奥師は、佐久良川の支流である宮川沿いに位置し、北で中之郷、東で西明寺、南で北畑・音羽・仁本木・西大路、西で村井・鳥居平と接しています。

字域の中央部を蛇行しながら宮川が横断し、集落は字域の北西部で二手に分かれて形成されています。

字「四ッ谷」の丘陵上の平坦地には室町時代に東桜谷地域の在地領主の小倉氏の本格的な中世城郭である四ッ谷城跡がありましたが、昭和初期の開墾によって消滅しています。

日野町の石切り場としては、石子山北面の小野村が知られています。石子山の南面にあたる字域の北部中央の字「殿立・石古山・産家・中尾」でも花崗岩を産出し、明治10年代初頭の『滋賀県物産誌』に石工の名がみえるように、奥師にも石切り場があったことがわかります。

江戸時代初期には、中之郷村の枝郷でしたが、「近江国郷帳」(元禄郷帳)に「二三四石七斗 奥師村」とあることから、この頃に独立したと思われる、元禄8

(1695)年大洞弁天寄進帳には奥師村の人数は119名と記されています(『滋賀県の地名』)。

領主は、元和3(1617)年から文久2(1862)年に至るまで彦根藩井伊氏でした。

若宮八幡神社とイリコ祭

集落の北西部にある字「洞」には、奥師の鎮守社である若宮八幡神社があります。

主祭神は、誉田別尊(応神天皇)で、若宮八幡神社の手水鉢 部分



日野歴史探訪

私たちの住む日野町には、52の大字があり、それぞれの地域が豊かな自然と歴史文化で彩られています。温故知新では、町内各大字の歴史と代表的な文化財をシリーズで紹介していきます。

四ッ谷城との関係から、この辺りを支配していた武人の守護神として祀られたものと考えられています(『東櫻谷志』)。創祀年代等是不詳ですが、宝永3(1706)年の棟札や「天明三(1783)癸卯年三月」と刻された手水鉢が残されています。

若宮八幡神社では、かつては7月14日に、現在はその前後の日曜日に、「イリコ祭」が行われています。

「イリコ」とは大麥の粉のことで、その名が示す通り大麥の粉を神饌として行われる祭です。この祭には次のような由緒が伝わっています。

昔、7月の暑い盛りに村で流行り病が蔓延したため、氏神に祈禱して治めてもらおうということになりました。麦の収穫の時期でもあり、暑気に効くイリコを神饌として祈禱したところ病が治まったということから、奥師ではこの祭のことを「夏祈禱」とも呼んでいます。

なお、祭のいわれとしては、四ッ谷城跡の礎石を持ち出したことにより村で

疫病が流行し、人々は四ッ谷城主の祟りではないかと恐れ、その石を元に戻すとともに、疫病退散の祈禱を行ったという伝説も残されています。(『近江日野の歴史』6巻民俗編)

神事は、祝詞奏上、玉串奉奠、神楽奉納と続き、拝殿前で湯立神楽が奉納されます。神饌のイリコは、二毛作の裏作で大麥が作られていた昭和30年代後半までは、各家から精白した大麥を1升ずつ社守宅へ持参し、そのうち3升をホウラクで炒って、製粉業者にイリコにしてもらっていたといえます。このイリコと氏子総代が準備したヒジキの煮物が神饌として供えられました。

拝殿前の湯立神楽の様子(平成17年)



問

近江日野商人ふるさと館「旧山中正吉邸」

☎ 0748-52-0008

本の紹介

怪異怪談探索ハンドブック

怪異怪談研究会／監修 青弓社

近年、怪談やホラーがブームとなり、図書館でも多くの怖い小説が貸し出されています。この本はその元となる「お化け」や「怖い話」を調べるための方法を解説した一冊です。

本書を片手に日野町の怖い話をまとめられた際には、ぜひ日野町立図書館にもご寄贈ください。



図書館からのお知らせ

●本や雑誌の返却日を延ばすことができます！

借りた本や雑誌は返却期限内であれば、一度だけ延長ができます。本をお持ちいただければその日から3週間、電話の場合や現物をお持ちでない場合は、10日間延長ができます。ただし、返却日の過ぎた本や予約のあるもの、最新号の雑誌、CD・DVD等は延長できません。



問 日野町立図書館
☎0748-53-1644

6月						
月	火	水	木	金	土	日
1	2	3	4	5	6	7
8	9	◇	11	12	13	14
15	16	◇	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30					

■…休館日
□…えいが会

◇…図書館ちびっこ広場
○…おはなし会

7月						
月	火	水	木	金	土	日
		1	2	3	4	5
6	7	◇	9	10	11	12
13	14	◇	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	31		

○…おひざでだっこのおはなし会

行事予定

「おはなし会」

6月13日(土) 11:00～(30分程度)
テーマ「雨ふり」※工作会も行います。

「おひざでだっこのおはなし会」

6月20日(土) 11:00～(20分程度)

3歳くらいまでの親子を対象に絵本や手遊び、わらべうたなどをしています。

「図書館ちびっこ広場」

6月10日(水)、17日(水) 10:00～12:00
0～3歳のお子さんが対象です。

「えいが会」

6月21日(日) 14:00～

『夏至』2001年／フランス、ベトナム(112分)

秘密を抱える3姉妹がそれぞれの愛と向き合う姿を綴ったヒューマンドラマ。

この背景には45回にわたる「がにもやん通信」の積み重ねがあります。氏郷公の人物や生涯を、子どもたちの心に届くやさしい言葉で綴り続けてくださった若林副会長、そしてそれを一冊にまとめようと提案された奥田会長をはじめ、顕彰会の皆さまのご尽力には頭の下がる思いです。こうした地道な取り組みが、まちの未来を確かに耕してくださっているのだとあらためて感じています。

ところで、先人をたたえ、その遺徳をしのぶという行いは、目

青雲之志

～町長コラム～

日野町長 堀江 和博

先人を敬う心を、 未来の子どもたちへ

の前の利益や成果といった物差しでは測りにくいものかもしれない。しかし『論語』のなかには、「終わりを慎み遠きを追えば、民の徳厚きに帰す」という言葉があります。亡くなった人を丁寧で、遠い先祖を心にとどめる——そうした営みを大切にすると、社会では、人々の徳が自然と厚みを増していく、という教えです。

すぐに見返りの返ってこない行いだからこそ、そこに意味があるのだと私は思います。自分のことだけ、今のことだけ——そうした視点を一旦脇に置き、誰かのために、あるいはまだ見ぬ次の世代のために何が残せるかを考える。先人への敬意は、まさにそうした心を私たちの内に育ててくれる礎ではないでしょうか。先人が礎を築いてくださった日野のまちが、今なお私たちの暮らしを支えているように、私たちもまた、次の時代を支える側でありたいと思います。

副読本を手にした子どもたちが、先人の生き方にふれながら、自分の暮らすまちを誇りに思い、やがて自分も誰かのために何かを残せる人へと育っていく。日野の先人を敬う心を、これからも町ぐるみで大切に紡いでまいります。